

飯田リニア駅前広場 木造大屋根講演会 「伊那谷の森の木がつくる 大きな結いの屋根」の報告について

1 目的

リニア駅前広場に木造大屋根を整備する意義や考え方を市民や関係者に広く周知し、一部供用開始に向けて機運醸成を図る。

2 日時 令和8年2月28日(土) 13時30分～16時30分

3 会場 エス・バード ホール

4 参加者数 約300名

5 登壇者

- ・東京藝術大学 北川原 温 名誉教授
- ・東京大学 稲山 正弘 名誉教授
- ・新井建築工房+設計同人 NEXT 新井 優 代表 (木造大屋根実施設計チーム代表)



6 講演会の内容

- (1) リニア駅前広場の概要説明 (飯田市リニア推進部 リニア整備課)
- (2) 講演会 「結いの文化」でつなぐ未来～飯田市が小さな世界都市へ～
東京藝術大学 北川原 温 名誉教授
- (3) パネルディスカッション リニア駅前広場の木造大屋根に見る伊那谷における木造建築の未来
 - ・コーディネーター 飯田市 佐藤 健 市長
 - ・パネリスト 東京藝術大学 北川原 温 名誉教授
東京大学 稲山 正弘 名誉教授
新井建築工房+設計同人 NEXT 新井 優 代表
- (4) 意見交換
- (5) 会場内展示
 - ・リニア駅前広場 デザイン模型、木造大屋根検討模型、県内類似木造建築物の模型、リニア関連動画、水引、阿島傘の展示
 - ・NBS 絵画コンクール 小学生受賞作品の展示
 - ・森林循環パネル、木材、丸太(ヒノキ、スギ、カラマツ)の展示など

7 木造大屋根の概要

- ・第1期整備面積 約1,000 m² (リニア駅前広場内の7箇所)
- ・使用する樹種 ヒノキ (一部スギを利用)
- ・木材調達先 野底山を主体に飯田市産材を基本とする
- ・事業費 約2.5億円
- ・工事予定時期 令和9年度を予定

8 講演会

- (1) テーマ 「結いの文化」でつなぐ未来 ～ 飯田市が小さな世界都市へ ～
- (2) 講師 東京藝術大学 北川原 温 名誉教授
- (3) 内容
 - ・欧米は木を材料としてみているが、日本は木を文化としてみていることが大きな違い。
 - ・木材は鉄やコンクリートと比較すると、比強度が強い。製材してから使用すると、60～70年で最大強度となる。

- ・木造大屋根は、集成材ではなく無垢材を使用し、飯田市を中心に地元の木材を使った屋根としている。
- ・木造大屋根のメンテナンスが、人と人との結び付きを生み教育に繋がり文化となり得る。

9 パネルディスカッション

(1) テーマ 「リニア駅前広場の木造大屋根に見る伊那谷における木造建築の未来」

(2) 内容

【要旨】

(木材を使う意義)

- ・木造大屋根を作るから地域の木材を使うのではなく、森林資源が豊富な地域だからこそ、身近にある資源を活用して建設するところに木造大屋根を整備する意義がある。
- ・既製品とは違い、長い準備期間を経るからこそ愛着が沸き、大切にしていきたいという思いにつながる。

(設計上の配慮)

- ・木造を維持管理していく上で、木材劣化の一番の要因は湿気や雨にさらされることで、その対策を適正に行うことが重要。この木造大屋根は、雨がかからない軒下に木材を使用する構造となっている。また、劣化しやすい場所は、取替ができる構造となっている。
- ・コスト面では、地域産材を使うことにより、移動コストが抑制できる。大屋根は、一般住宅用に流通している木材を使い、接合部は伝統的な木組みの工法を採用することで、特殊な金物を使用して接合する必要がなくコストの抑制にもつながっている。

(維持管理)

- ・地元の設計チームが関わったことで持続可能な維持管理体制の構築につなげていく。木造大屋根をきっかけに地域の森林資源の活用の循環を進めることが大切。

10 アンケートより

- ・地元の木を使うことが新しい文化を作るという考えに感銘を受けた。
- ・木造大屋根が単なる雨よけでなく、この地域にとって、多方面から大きな意味を持つものと理解できた。完成したら終わりではなく、メンテナンスなどを通じて、将来にわたり市民が関わり学ぶ場にしていくことや、活用していくことが非常に大切だと思った。
- ・この大屋根は、構造が網目のようになっており、鳥や蜂等が巣を作りやすい構造になっている。鳥が巣を作ると、必然的に鳥の糞等が目立つようになり、景観が損なわれる。巣を作りにくいような対策や人の動線上に作られないような工夫をする必要がある。
- ・各地の木造施設で、腐食などが問題になっていることから、木造大屋根に対して疑念を持っていたが、様々な対策が講じられることを知り不安が払拭された。

(参考)

【コーディネーター発言要旨】

① 東京藝術大学 北川原 温 名誉教授

- ・ 森林資源は文化資源。豊富な森林資源があるからこそ、当地域で木造大屋根を建設する意義がある。
- ・ 地元建築事業者の9社の皆さんに関わっていただき、完成度の高い実施設計になった。
- ・ この地域の人々は自然と共生する知恵を持っており、それが経済を動かしていくきっかけにもなっている。長期的には文化が大きな経済を動かしていくことを思っている。

② 東京大学 稲山 正弘 名誉教授

- ・ 木造大屋根は、接合部に特殊な金物を使わず、日本の伝統的な木組みの手法を用いた。地元の木材を地元で製材し、地元の工務店で組み立てて作ることによって、地域内経済の循環を図ることができる。
- ・ 細い木同士を組合せることで木はより強い力を発揮する。特殊な金物に頼らなくても木材の持つ本来の力を引き出すことによって、耐震性や耐久性を持たせることができる。
- ・ 木造大屋根は、住宅用の一般流通木材を組み合わせて使っている。一見複雑な構造に見えるが、3Dデータの活用により、仕口（木組みの加工）のプレカットが容易である。接合部に特殊な金物を使うと高額になってしまうが、日本の伝統的な仕口を使用することで、コストも抑えられる。
- ・ 木材劣化の一番の要因は、湿気った状態が長く続くこと。木造大屋根に使用する木材は、すべて屋根の軒下部分に使われており、直接雨が当たらない構造とした。紫外線による劣化対策としては、保護塗料を塗るとよい。
- ・ 駅前広場の大屋根はこの地域のシンボルになると確信しており、新たな観光資源になる。

③ 新井建築工房+設計同人 NEXT 新井 優 代表

- ・ 伊那谷の自然や文化を表現した大屋根を実現することが地元設計チームの役割。
- ・ 木材を劣化させないために、深い庇（ひさし）などで柱を守る工夫を施し、実施設計の中で防虫対策や耐久性、木材保護塗装、雨水の流れ方を繰り返し検討、検証し、苦労した点も多くあったが、世代を越えて地元の設計者が結集し、実施設計をまとめることができた。
- ・ 大屋根継承していくための、地元の木材、地元での加工、地元大工による施工といった地域での技術継承や維持管理の体制が作りながら、木造大屋根が地域から愛され、木造大屋根を玄関口として、伊那谷の文化に触れるためのきっかけになっていくといい。